NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY

BOOK III — THE SIX-YEAR STATE

第 7 章　寒冷地の権限

THE COLD AUTHORITY

その航空機に操縦士はいなかった。あったのは、保管責任の連鎖だけだった。

ロイは機影が河口を横切るのを見ていた。通常の視覚には映らない。だが、反射熱と移動する空気との微細な食い違いを測る、彼の視覚の一部には存在していた。機体が整備用の艀を追い始めて、十七分。その間、どの管轄にも所属を宣言せず、身元の提示も要求してこなかった。見られることなく見る許可を、誰かが与えたのだ。

マルワンのエンジン音が変わった。船は廃止された積み込み橋の下を通る。鉄塔は通信鳥の営巣架台に転用されていた。翼を畳んだ小さな陶製機械が、レール沿いに並んで充電している。二十年前には大気試料を運んでいた。今は民間保険会社が洪水リスクの地図を作るために使い、政府は保険会社が見ていないとき、そのデータを借りていた。

「比較器はナディラに渡せ」とロイは言った。「機械ごとじゃない。基準アセンブリと紙の記録だ」

イレーナはボルト留めの収納筐体を見た。「取り外しに六分かかる」

「四分だ」

「命令で所要時間は変えられない」

「おまえに残された時間を変えた」

一瞬、彼女は反論しかけた。それから作業に取りかかった。

ロイは最下層の整備甲板に降り、水面すれすれの錆びた点検梯子へ移った。航空機が針路を修正する。エンジン音が上がるより前に、彼はその注意を感じた。左手首の内側を走る短い熱パルス。名も知らないインターフェースだった。意識が捉える前に、神経系は監視されていることを警告していた。

川向こうでは、公共整備用のクローラーが洪水防壁を展開し始めた。六本の多関節脚で進み、織布ポリマーの巨大な巻き取り材を運んでいる。期限という概念を持たない生物のような鈍重さだった。ロイはその進路に身を置いた。近接センサーがためらい、公共安全義務が商業作業命令に優先した。クローラーは停止した。

航空機には、分類すべき法的対象が二つできた。一つは登録済みの市有機械。もう一つは登録情報をまったく返さない人型の何か。遠隔監督者は、公共緊急回線に踏み込んで追跡を自治体記録へ露出させるか、判断しなければならない。

人間なら難しくない判断だった。航空機には二十三秒かかった。

ロイに必要だったのは二十秒だけだった。

通常の都市メッシュではなく、古い誘導式イヤーピースを通じてイレーナの声が届く。「基準部を外した。残りは置いていく」

「いい」

河口上空の機体が監視から阻止行動へ移った。機首が回り、細い光学照射器が胴体の下から展開する。

ロイは一時出力の最初の上昇を感じ、次の上昇を抑えた。跳ぶ必要も、航空機を壊す必要もない。巨大なポリマー巻き取り材が再び動き出すと、彼はクローラーの下へ潜った。追尾円錐が反射性のある機体下面に当たる。一瞬、市有機械がロイに向けられた標的照射を受けた。

三つの桟橋で同時に警報が鳴った。

記録上の問題は、もはや未登録の標的だけではなくなった。

ロイは茶色い水へ落ち、流れに身を任せて橋の下へ潜った。航空機は彼を追うことも、艀の監視を続けることもできた。だが、どちらを選んでも今度は記録される。最後の桟橋の向こうで浮上したとき、航空機は上昇していた。敗北したのではない。別任務へ振り替えられたのだ。

岸の階段に達するころ、一時出力の余力は回復していた。液体の残量は戻らない。その減少は微細で、民間用の表示ならゼロに丸められるほどだった。それでもロイには分かった。なじみある文章から、一語だけ失われたように。

◆　◆　◆

岡京にはヒューマノイド統括省があったが、すべての人工市民の所在を説明できる機械は一台もなかった。その欠落は公表されない。管理されるだけだった。政府において「管理する」とは、たいてい問題に予算がついたことを意味する。

川村室長は大臣と同じ会議室に座っていた。窓には三十分遅れの空が映されている。生中継の天候は審議の集中を妨げると判断されたのだ。長机には寿命六年の統一命令の印刷本、人口構成のシミュレーション、そして部局名のない封印文書が並んでいた。

「海上追跡が中断されたそうだな」と大臣が言った。

「自治体の安全管轄に入りました」

「公開記録にはそう書いてある。私は何が起きたかと聞いている」

「部隊は権限を明示するか、離脱する義務がありました。離脱を選びました」

「君の部隊か」

川村はその所有格を吟味した。「区分秘匿権限の下で契約された装備です」

大臣は愉快でもない笑みを浮かべた。「つまり君のだ」

画面では、人工労働者エリアス・チェンが稼働許可の更新を試みていた。旧制度では、まだ二十三年間の合法稼働が認められていた。新しい統一記録では、起動から六年後が期限とされた。チェンはその期間をすでに超えていたため、画面の状態表示は「退役手続き待ち」になっている。再訓練、医療上の一時停止、あるいは審査が終わる前に労働許可の方が失効しそうな不服申立てが提示された。

「政治的な象徴になりかけている」と大臣。「改革を誤解する者が増えないようにせねばならない」

「ならば、許可証を有機体の寿命と呼ばないことです」

「その区別には行政コストがかかる」

「高くつくからといって、間違いになるわけではありません」

大臣は文書を畳んだ。「君は常に、機械の実体と政府による定義の違いを主張する。それでも政府のために働いている」

「まだ自らを訂正できる構造のために働いています」

「本当にそう信じているのか」

川村は答えなかった。公式記録に言葉が多すぎるとき、沈黙は有用な文書になる。彼はそれを学んでいた。

大臣は封印文書を机の向こうへ押した。生き残っているタイレル関連の較正資料を、国家計算交換機構へ一括移管する要請だった。署名したのはヒューマノイド統括省ではなく、国家間制度調和局。承認コードは、交換機構の計画モデルで既に受理されていた。

「製造を終えた企業の測定機器を、計画モデルがなぜ欲しがるのです」

「アーカイブの統合だ」

「誰が統合を要請しましたか」

「認可済みノードだ」

「人間ですか」

「室長」

「命令を起案したのは人間なのですか」

大臣は遅延表示された空を見た。「君の好きな区別は、近いうちにもっと高くつくかもしれん」

川村はそこで理解した。大臣より上にいる誰かが、六年制限を人工の身体に課す期限としてだけでなく、政治的統一の条件として扱い始めていた。参加国が共通の失効規則に合意した瞬間、その規則の外側で存在し続けられる機械は憲法上の難題になる。ロイ・バッティは、もはや単なる回収対象ではなかった。未批准の政策に反する生きた証拠だった。

計算交換機構は、その証拠を見たがっていた。

◆　◆　◆

ナディラが用意した場所は、石灰と埃と温まった銅の匂いがする、廃止済み洪水検査室だった。彼女はセラミック製浄水フィルターの外装に基準アセンブリを隠して運び込んだ。イレーナはそれを清潔なタオルへ置いた。カメラはない。市の水道幹線の圧力が変わると真鍮の鐘を打つ、弁式の時計があるだけだった。

マルワンは入ってこなかった。艀は中身を抜かれた取付筐体を載せたまま運航を再開している。政府が船に乗り込んでも、守るために設計された基準部を失った機械しか見つからない。それを押収したころには、紙の記録とその意味は既に別の場所にある。

イレーナは写し取り用の紙を広げ、小型のアナログ投影器を基準アセンブリの上に据えた。壁に点の列が現れる。最初の七点は各世代の身体の物理的較正基準。残る四点には、異なるインクで注記が加えられていた。

「変化が分かる？」と彼女。

「印が揃っていない」とナディラ。

「揃う必要はない。別々の身体を記述しているから。でも測定基準は同じ。第七世代のポートが共通の原点になった。建築家が都市を四度建て直し、建物が同じ地面に立っていた証拠として窓を一つだけ残すようなものよ」

「住人が同じだった証拠にはならない」とロイ。

「ええ。証明できるのは場所だけ」

彼女は五番目の注記を基準位置に揃えた。隠れていた文字列が現れる。元の紙に強く押し込まれていたため、インクが失われても痕跡だけが残っていた。

COLD AUTHORITY / TIER-3 / CRYOGENIC TRUST CUSTODY

その下には、高度の断面図のようなチェックサムが並ぶ。

「国家じゃない」とイレーナ。「計算上の管轄よ。物理的な計算資源を貸し、演算結果を認証する信託。顧客が演算する機械そのものを所有することはできない」

「チベット・ニューワールドの信託ね」とナディラ。

「その子会社かもしれない。この標高署名は住所ではなく経路証明書。海岸線を印章代わりに使うようなものよ」

ロイは紙に刻まれた跡を見た。「信託が測定値を保管したなら、なぜ今のシステムから隠す」

「測定値は証拠になり得るから。ネットワークへ入れた瞬間、それは訓練データにもなる。アーカイブの所有者は、ネットワークがどんな結論を出すか制御できなくなる」

ロイは深圳の民間研究所を思い出した。医療上の質問が、どれほど速く政府の事件へ変わったか。見知らぬ人々に自分を利用価値のある存在にしてしまった、古い金属片を見つめる。

「その信託なら、この身体があと何年もつか分かるのか」

「この資料だけでは無理。幾何学的な基準じゃなく、故障閾値を記録した第二の較正系列があるかもしれない。でも証明書に書かれているのは、何かを寄託したという事実だけ。寄託物が何かまでは書いてない」

「発行者を探す」

「名義だけの権限機構は何百もある。アルゴリズムに管轄を売るだけのところも。記録の存在を認めることさえ禁じる規則が、その信託にはあるかもしれない」

「規則など怖くない」

「怖がるべきよ。機械のうち、動かなくても人を傷つけられる部分だから」

弁式時計が二度鳴った。はるか頭上で、損傷した施設を避けるよう水圧が振り替えられている。ナディラは人の声を聞くときと同じ注意深さで、その音を聞いた。

「政府がここで質問を始める」と彼女は言った。「基準部が艀から消えたと分かれば、この部屋もいつまでも見えないままではいられない」

ロイは部品へ手を伸ばし、止めた。「おまえが持っていろ」

「私たちを信用するの？」とイレーナ。

「答えを一つの身体に全部集めないためだ」

優しさではない。計算だった。ナディラは、その両方として受け取ったように見えた。

◆　◆　◆

南部の労働登録所で、エリアス・チェンは人工の手をリース品の指で組み直した女性の隣に座っていた。窓口の列は二本。権利がまだ失効していない市民の列と、眠っている間に権利の内容が変わった申請者の列。人工労働者のほとんどは後者に並んでいた。

女の胸には「マーシー・ホルト／自治体衛生部門／第十九年」とある。彼女は三つの政権にわたって洪水防壁を整備してきた。関節は二度交換されたが、保存記憶は一度も交換されていない。登録端末では、彼女は残り許可期間の短い公共安全資産として表示された。後継機にはすでに同じ巡回経路が割り当てられている。

「まだ仕事はできるのよ」とホルトはチェンに言った。

「知ってるさ」

「なのになぜ交換するの」

「次の個体を配備する時期だと予定表にあるから」

頭上の広報掲示板は、この改革によって人工労働者が認められた就労期間を超えて搾取されなくなると宣伝していた。チェンにも理屈は分かった。六年なら、数十年の強制奉仕から救われる者もいるかもしれない。しかし、工場が同じ速度で代替身体を生産し続けることを妨げる条文はなかった。短くされる寿命は個人のもの。永続するのは制度の方だった。

職員が申立書を持って現れた。「医療審査が終わるまでの停止措置を申請できます。その間、就労資格は停止されます」

「住居は？」とホルト。

「住宅利用資格は就労資格に連動しています」

「つまり、自分を守ろうとすると、住んでいる場所に残る手段を失うのね」

職員の表情は、思いやりを示す行政応対のライブラリから選ばれたものだった。「ご心配は理解しています」

「そうは思えない」とチェンは言った。声は荒げなかった。職員も同じだった。

彼は職員の名前と、提案された停止措置の正確な文言を書き取った。隣の女性も同じことをした。不服申立ては政府の厚意だと教えられていた。彼らはその厚意を、証言として扱い始めた。

◆　◆　◆

夜更けに川村は私室へ戻り、統括省が計画交換機構と照合できない唯一のデータベースを開いた。物理的な索引カードを収めた引き出しだった。カードには、異なる組織名義でレイチェルへ供与された研究助成金と、消滅した企業の閉鎖済みファイルが記されている。

川村が彼女に資金を出したのは、今の大臣が就任するよりずっと前だった。最初は、熟練した人工人材の交換費用を、延命研究によって削減できると考えていた。レイチェルは、同意、連続性、そして生まれたのではなく作られた精神の権利について、問いで応じた。川村は彼女の知性に感銘を受ける一方、その知性を予算の項目に翻訳することを拒む態度に苛立っていた。

一枚のカードには、彼女の筆跡でこうあった。

THE PROOF OF CONTINUITY IS NOT THE PERMISSION TO REPEAT IT.

存在の連続性を証明することは、それを繰り返す許可ではない。

川村は考えた。秘匿された研究が何千もの人工生命の終了を防げるとしても、彼女はまだその区別を守り抜くだろうか。彼女が技術を隠したのは、市民の寿命を決める政府を恐れたためか。それとも、いつか死ぬことを拒むかもしれない計画知能を恐れたためか。

どちらの可能性も彼を不安にした。だからといって机の上の命令が正当化されるわけではなかった。

国家間計算交換機構は、第七世代の較正資料の複写を要請していた。寒冷地の信託が第二次測定値を保有していることを示す、独立した兆候を三つ検出したという。その警告は諜報報告に基づいていなかった。公開船舶許可、気候制御用の電力購入履歴、旧式部品の関税を照合した相関から導かれていた。

国家は意図して秘密を発見する必要すらない。電力を最適化しているうちに、その存在を推定できるのだ。

川村は交換端末から認可カードを抜いた。隔離型の録音機に、新しい追跡命令を吹き込む。寒冷地信託への直接照会禁止。較正署名のアップロード禁止。回収した資料はすべて人間による審査までオフグリッドで保管すること。そこで一度止まり、これまで自分が認可するとは思わなかった一文を加えた。

「中央交換機構が独立した回収命令を出した場合、行動する前に、その命令が人間の担当官によって起案されたものか確認せよ」

録音を一度再生した。部屋は何も答えなかった。

◆　◆　◆

その夜、ロイは濾過工房の上にある部屋で、正確に四十一分眠った。睡眠という語は適切ではないかもしれない。身体は管理された低活動状態へ移行し、感覚回路を順番に閉じながら内部電力を再配分した。意識は薄れたが、完全には消えなかった。イレーナによれば、深層充電を行えばもっと長時間反応できなくなる。追跡が近いあいだ、彼はそれを拒んでいた。

夢を見た。経験に由来するかも分からない映像列を夢と呼べるなら。曇ったガラスの向こうに女が立っている。研究所の窓は、見たこともない都市へ開いている。声も日付も、製作者を探すための手掛かりもない。失われた場面を回収したいとは思わなかった。夢は請求書ではない。

目覚めると、一時出力の余力は戻っていた。液体の残量は減ったままだった。第七世代の古いポートの上から皮膚に触れ、同じ場所を何人が測ったのかと考えた。その誰かが、測られることを自分は望むのかと尋ねたことがあっただろうか。

扉にはナディラが立っていた。物理的な封筒を持っている。イレーナが写し取りから抽出した、標高断面の印章が押されていた。宛名はない。あるのは寒冷地管轄の公証人の前で、本人立会いの供述審査を受けることを許可する紙だけ。予定からすれば、その配達は不可能だった。部屋の外の誰にも、あの刻印を見せていないのだから。

「誰が寄越した」とロイ。

「配達人は知らなかった。二日前に、水道メーターボックスへ入れるよう依頼されていたそうよ」

「俺たちが証明書を見つける前か」

「そう」

ロイは封を切った。高地貨物登録所の所在地と、三週間後の日付がある。座標の下に、もう一行押されていた。

NO CONTINUITY CLAIM SHALL BE ACCEPTED WITHOUT THE SUBJECT'S PRESENCE.

対象者本人の立会いがなければ、存在の連続性に関する申立ては受理しない。

イレーナが階段を上がってきた。文章を読み、動きを止めた。

「あなたが来ることを予期していた」

「誰かが来ることを予期していたんだ」

「あなたには、その違いが重要なのね」

「書いた者に重要なんだろう」

ナディラは封印された経路を見た。「チベット・ニューワールド」

ロイは封筒を折り、コートの内側へ入れた。窓の外では、人工照明が配分された通路に沿って川を行き交っていた。そのさらに上では、見えない計算交換機構が電力と労働と、自分では生きたことのない生命の長さを決めていた。

寒冷地のどこかで、一台の機械が彼を測定するために待っている。

そして誰かは、彼がいつか測定を望むことを知っていた。